教主さまお作　鉄絵茶盌 銘「かむながらたまちはへませ」

【唐津土】

平成29年（2017）

阿づまの光

12月号・Decembro

題字 出口直日

通巻第585号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒

〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

朝夕(あさゆふ)に御前(みまへ)に祈(いの)り業(わざ)をなせば
いと安(やす)らけく進(すす)みゆくべし

出口王仁三郎聖師

歓喜と感謝にみちて

東京宣教センター次長　橋本 伸作

今年も早いもので、あとわずかとなってまいりました。私自身も東京宣教センターに異動して、9カ月が経過。時間ばかりが過ぎていくのをもどかしく感じながら過ごす毎日です。

こうして悩んでいる間も、時計の針は刻々と進んでいくことを思うとき、今、与えていただいている物事に対して、精いっぱいお仕えさせていただくしかないのかなと、思ったりもいたします。

とは言うものの、悲しいかな、自分にとって都合の良いことは喜んでするけれども、自分にとって都合の悪いこと、面倒なことについては、消極的な気分になってしまうこともあり、できれば避けたい、人に任せたい、そんな後ろ向きな自分が見え隠れいたします。

しかし、その都合の良いこと、都合の悪いことの区別は、あくまでも自分自身の〝物差し〟で判断していることであって、本当は、その一つ一つの事柄が、神さまからお与えいただいている大切なご用の機会なのかもしれないと思うとき、その都合の悪いこと、面倒なことも、やはり「ありがたくさせていただこう」「積極的にさせていただこう」という気構えで当たらせていただかなければならないと、反省することしきりです。

尊師さまは、「仕事をする際には、不平不満を心中にいだいては、かえって悪い。因縁を生み出しているばかりで何にもならぬ。何事をするにも、歓喜と感謝に充ちみちて、ありがたく面白く、懸命にやらねばならぬ。不平や不満でやったことは、外形上、どんな立派なことでも、本当は罪を作ったばかりである」（「信仰覚書」第5巻）とお諭しいただいています。つまり、私たちは外形上、何をしているかが問題ではなく、どのような気持ちでさせていただいているかが重要なのだと思わせていただきます。

師走を迎え、何かと忙しい日々。こんな時こそ、〝勇めば勇むことができる〟の精神で、歓喜と感謝にみちて、ありがたく面白く過ごさせていただき、「一陽来復の春」を迎えさせていただきましょう。

大本の宗際化活動

～宗教の壁を越えて～

宗教同士が争っていては、平和を実現することはできません。大本は、万教同根の理念のもと、宗教間対話を強く推進し、〝宗際化〟活動を通じて、世界平和の実現を目指しています。大本の宗際化活動＝宗教間対話＝に関する歴史と特色を紹介します。

宗際化（宗教間対話）に関する教え

大本では、開教当初から、一般に宗教間対話と呼ばれる宗際化活動の重要性が説かれ、日本の各宗教宗派の先鞭をつけてきた歴史があります。

出口なお開祖は、明治25（1892）年の大本開教にあたり、宗際化活動（宗教間対話）の必要性を示唆し、もう一人の教祖出口王仁三郎聖師は、大正時代に口述された『霊界物語』で「無形の障壁の最大なるものは人種と人種の間、宗団と宗団との間にあり、有形の大障壁を除くには、まず無形の障壁から取り除かねばならぬ」と述べ〝万教同根〟という考えを提唱しました。

これは、さまざまな宗教があり、教えは違うけれども、地域や時代によって説き方が変わっているだけで、正しい宗教は全て、元は一つの神さまから出ているという意味です。

教えの中に、宗際化の必要性が説かれていることが大本の特徴であり、宗際化活動は大本の運動の根幹の一つと思っています。

大本の宗際化活動の歴史

大正12年、大本は中国発祥の宗教である道院・世界紅卍字会と提携しました。これは全く対等な立場での提携でした。道院は、大正10年の旧2月9日、中国の山東省済南で設立され、フーチと呼ばれる方法で神さまのお告げを得ます。

大本との提携も、このフーチがきっかけでした。大正12年、日本で関東大震災が起こりました。震災が起こる前、道院でフーチが出て、「非常な災害がこれから日本に起こるから救援物資を持って行け。そして提携すべき宗教があるから探してくるように」という神託が下ったのです。道院の人々は、日本に救援物資を届け、その後、提携すべき宗教を捜し歩き、最終的に大本の発祥地・綾部を訪ねます。そこで出口王仁三郎聖師、出口すみこ二代教主と出会い、すぐに提携しました。

聖師は、大正14年、北京で世界宗教連合会を作りました。これは超宗派の世界的な組織で、大本の他、道院、悟善社、ラマ教、道教、仏教、イスラーム、キリスト教といった宗教が加盟していました。

さらにこの年、聖師は、大本の外郭団体・人類愛善会を創立。その後も、韓国の普天教、ベトナムのカオダイ教、イギリスの心霊団体、ドイツの白旗団、ブルガリア白色連盟、ブラジルの心霊団体、イスラーム、ラマ教などと提携します。しかし、昭和10年に第二次大本事件が起こり、大本の活動は全て一時中断します。

大本海外作品展の開催

戦後の昭和21年2月に大本は再発足します。しかし、昭和23年に聖師が、昭和27年には二代教主が昇天し、出口直日三代教主の時代へと移ります。

三代教主時代、宗際化へと大きな進展をみる「大本海外作品展」が、昭和47年から3年余りをかけ、6カ国13会場で行われました。最初、ヨーロッパで行われたのですが、会場をアメリカに移し、ニューヨークの聖ヨハネ大聖堂で作品展が行われました。作品展を行う前に現地からの要望に従い、大本祭式による開催奉告祭が聖ヨハネ大聖堂で、後にはサンフランシスコのグレース大聖堂でも行われました。どちらもキリスト教プロテスタントの一派・聖公会の聖堂です。

作品展が終わった後、これに興味を持った現地の新聞記者がグレース大聖堂を訪問し、スタンレー・フォレスト・ロジャーズ聖堂長に質問しました。「今回は、聖公会の教会で神道式の祭典が行われたが、逆に神道の神殿で聖公会の祭典をしますか」と。それに対して師は「もちろんです」と答えました。このインタビュー記事が大本にも知らされ、昭和52年2月、綾部の大本神殿みろく殿での米国聖公会との初めての共同礼拝になっていきます。

共同礼拝は、宗教史上画期的なことで、この時来賓として参列していた湯浅八郎国際基督教大学（ICU）名誉総長が祝辞を述べました。その中に「宗際化」という言葉があり、これを機に大本では、いわゆる宗教間対話を、宗際活動とか宗際化活動と呼ぶようになっています。

聖公会との交流が深まる中で、聖公会の源流である英国国教会の大本山・カンタベリー大聖堂で、後の出口聖子四代教主が能「羽衣」を奉納しています。

世界宗教者祈りの集い

カトリックは、1960年代に第2バチカン公会議を開き、それまでの方針を転換し、他の宗教と対話をするようになります。その流れで、バチカンに、諸宗教対話評議会という宗教間対話を行う組織が作られ、関係者が大本を訪れました。

～21世紀・生きがい講座～

奥脇（おくわき） 俊臣（としおみ）（人類愛善新聞編集者）

昭和52年には、カトリックの総本山サンピエトロ大聖堂の最奥聖壇で大本式の礼拝を執行しました。昭和61年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が呼びかけ、イタリアのアッシジで世界宗教者の祈りの集いが開催され、現在でも毎年世界のどこかで祈りの集いが開かれていますが、大本も早くからそれにも参加しています。

このアッシジでの祈りの集いが、比叡山宗教サミットの開催の契機となり、大本も助力する形で昭和56年に第1回比叡山宗教サミットが行われ、本年、平成29年には30周年記念を迎えました。

大本とイスラームとの関係も大変深いものがあります。大本の代表者が平成3年、シリアのイスラーム最高法学者アハマド・クフタロ師のモスクを訪問しました。師は、米国聖公会のジェームス・パークス・モートン師と知り合いでした。彼のモスクに招かれ対話を深めるうちに、「あなた方は大本信徒であり同時に、ムスリムだ」とおっしゃられました。それが機縁で、メッカ巡礼を大本の代表者が果たすということがありました。

平成4年の大本開教100年には、大本の神殿・長生殿が建ちあがり、その翌年、第一回「世界宗教者の祈りとフォーラム」を開催。平成12年には、国連のミレニアム世界平和サミットが開催され、大本からも代表者が参加します。

平成13年、出口紅現教主が五代教主に就任し、平成14年には2回目の「祈りとフォーラム」を京都市で開催しました。

平成16年には、モンゴル・ウランバートルでモンゴル仏教の総本山ガンダン寺院との共同礼拝を。また現在、世界共通語エスペラントを通じて韓国の新宗教、圓佛教と交流をしています。

中東和平に向けて

中東和平についても進展があります。平成12年、大本の仲介もあり、綾部市とエルサレム市が友好都市宣言を結び、平成15年から「中東和平プロジェクト」が行われていきます。これは地方自治体が主体となり、大本も協力して活動するイスラエルとパレスチナ双方の子供たちを同じ人数ずつ招いて日本で友好を深めてもらうというプロジェクトで、第1回目は綾部市が主催して行われました。

わが願ひ エスペラントの 歌まつり
人類同胞（はらから）こぞりて エルサレムの野に

これは出口紅教主の短歌です。エスペラントで歌祭という平和の祭典を、エルサレムで実現したいというお歌です。

エルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの3つの一神教の共通の聖地でありながら、争いが絶えません。ここがやはり平和にならないと世界平和は実現できません。平成18年、第2回京都大本歌祭が、金剛能楽堂で行われましたが、その時にはイスラエル、パレスチナ双方の代表を招いて、歌祭に参列していただきました。そして、平成20年、大本東京本部でも歌祭を開催し、エジプト、ヨルダンの駐日大使、またイスラエルの公使、パレスチナ代表部代表といった中東諸国の各代表を招いて、歌祭に参拝していただきました。

さらに近年は、大本の宗際化活動も新たな展開をみせています。平成23年、出口紅教主が台湾道院の本部を、近年では同じくベトナム・カオダイ教の総本部を訪問しています。こういった昔から提携している団体との交流が深まる中で、平成28年4月3日、大本は人類愛善会国際ネットワークを立ち上げました。これに道院やカオダイ教、それに人類愛善会の海外分会に入ってもらい、王仁三郎聖師が説いた万教同根の思想を、世界に広く発信していこうとしています。

歌祭による合同の祈り

歌祭とは、歌垣をしつらえ、中央に次のような和歌が書かれた短冊を四方に飾ります。

八雲立つ 出雲八重垣 つまごみに
八重垣つくる その八重垣を

この歌は、記紀神話に出てくる素盞嗚尊が作った日本で最初の和歌とされていますが、聖師は、「この出雲八重垣の出雲というのは、どこの国も、ということで、八岐大蛇は退治したけれども世界各国には八重垣が築かれ、八重雲が立ち昇っている。この雲、垣根を取り払わなければいけない」と解釈しています。

歌祭は、こういった障壁を取り除くための祭典です。平成29年8月6日、亀岡に世界の宗教者を招いて「国際宗教代表者会議」を開催し、歌祭形式で、世界の平和を祈らせていただきました。

今後も世界平和の実現に向けて、宗教間の障壁を取り除くための歩みを、大本は一歩一歩、進めさせていただきます。

掲載文は、平成29年7月19日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑秋季大祭

東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣りは11月12日、午前10時30分から、斎主・出口文営氏のもと執行され、342人が参拝した。

祭員は関東教区各主会の祭務部長等、伶人は二絃の会関東支部、伊都能売神論拝読は、朝倉暢子群馬主会長、添釜は髙野社中が担当した。

祭典後、伊都能売神論拝読につづき開教125年大本開祖大祭教主さまごあいさつを拝聴。引き続き猪子恒東京宣教センター長があいさつに立ち、教主さまのご近況として大本開祖大祭にご臨席された教主さまのご様子を紹介。また、明年は東京本部開設50周年の佳節を迎えるとして、記念祭典として執行される大本歌祭の概要を説明。続いて七五三詣りのお子さんに猪子センター長から千歳飴が贈られた。

つづいて斎主の出口文営・大本楽天社代表が『歌祭の歴史と使命』と題して記念講話。在りし日の聖師さまの思い出や、歌祭復興に注がれた思い、その思いを継がれた二代教主さまのご心境などを語った。

また当日は、第17回「英語による大本基本講座」の参加者13人が来苑。参拝者を代表して元大本日本伝統芸術学苑生で陶芸家の、コーリーン・キーベルト氏があいさつした。

最後に奉納行事にうつり、二絃の会関東支部による八雲琴『振放曲』と、シテ出口文営楽天社代表よる宝生流仕舞『紅葉狩』（クセ）が奉納された。

また、群馬主会相談役で朝倉染布株式会社会長の朝倉泰氏が秋の叙勲で旭日単光章を受賞され、参拝者に披露された。

直会後には、コーリーン・キーベルト氏による公開講話『大本との出合い』が開講され、大勢の参拝者が聴講した。

聖師さまのお姿を目に浮かべながら、在りし日の思い出や歌祭の意義について語る、出口文営氏

家庭平安祈願祭

家庭平安祈願祭（26回）は、10月21日午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、49人が参拝した。

祭典では、斎主と祭員が全国から申し込まれた435件の氏名を全て読みあげ、家庭の平安と繁栄を祈念した。

祭典後、ビデオ「この世の向こうに」を鑑賞、引き続き、東京本部を代表して、猪子恒東京宣教センター長があいさつ。「人間は神さまに救けられて世の中に活躍し、神は人間に敬われてご神徳を現したまう」との聖師さまのお示しなどを紹介し、「家庭の平安は、その家庭の信仰と先祖崇拝が大変重要である」と述べた。

なお、全国から申込まれた家庭平安祈願は、祭典後一週間、東光苑神前で継続された。

21世紀・生きがい講座

第177回「21世紀・生きがい講座」は、11月15日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、出口眞人大道場講師（社会福祉法人愛善信光会理事長）が「日本人の誇りと使命」と題して講話した。参加者は50人（内、一般22人）。

講師は、「日本は神国、この神国に生まれた人民は優れた身魂を授けてある」との伊都能売神論を引用し「日本は特別な使命を帯びた国であり、皇室の尊厳や国家の使命、日本人の素晴らしさや尊さを再確認するべきときである」と語った。

参加者からは「愛国心について考える良い機会となった」（男性・一般）等の声が寄せられた。

東光苑祭典・行事予定

12月

10日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（土）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（181年）

20日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　ごきげんよう　春風ふくたでございます
～笑う門には福来たる～
講師　春風ふくた（漫才師）

25日（月）午前10時30分
出口日出麿尊師毎年祭（26年）

平成30年1月

1日（祝・月）午前7時執行
新年祭

1日～3日（月～水）各日午前9時30分から
年賀

7日（日）午前10時30分～午後3時
東光苑七草粥

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・成人式式典

17日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　没後百年
大本開祖・出口なおの生涯に学ぶ
講師　猪子　恒（東京宣教センター長）

19日（日）午前10時30分執行
聖師毎年祭（70年）